

出 品 解 説

○は写真図版

① 上下片鎌十字字槍 銘 武州住周重作

室町時代 天正

刃長 (穂) 二七・三釐 (九寸)。(枝) 一七・〇釐 (五寸六分)

形状 上下片鎌十字字槍、重ね薄い。鍛 板目、本交じり、地沸つく。刃文 互の目、尖り刃交じり、砂流しかかり、小沸つく。帽子 乱れ込み丸く返る。茎 生ぶ、先切り、鑢目切り、目釘孔二、表に六字銘がある。

武州下原鍛冶の始祖である周重の槍である。銘字は初代周重の典型的な字体で力強く入念に切っている。周重の現存する刀の刃文は直刃が殆んどであり、貴重である。武士の表道具である槍は、相当数製作されたと考えられるが殆んど残っていない。始祖周重の真骨頂を示す作品の一つである。

2 短刀 銘 武州住康重作

安土桃山時代 天正

刃長 三三・四釐 (一尺一寸)。反り 一・〇釐 (三分三厘)

形状 平造、庵棟、反りややつく。鍛 板目、本交じり、本目連なる。刃文 互の目乱れ、砂流しかかり、小沸つき、末相州風で棟焼があり、裏物打ちに飛び焼きがある。帽子 乱れ込んで小丸に返り深い。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先栗尻、鑢目切り、目釘孔一、指表に六字銘がある。

二代康重の寸延び短刀である。二代康重に、「武州住人山本藤右衛門康重作」銘で「天正十六年戊子十一月吉日」の年紀と所持名の入った槍がある。康重の名乗りは藤右衛門であり、いわゆる「藤右衛門銘」である。

③ 刀 銘 武州下原住康重

安土桃山時代 天正

刃長 七一・六釐 (二尺三寸六分)。反り 二・二釐 (六分六厘)

形状 鑄造、庵棟、反りややつき、中鋒延びる。鍛 板目に本交じり詰む。刃文 腰に互の目を焼き、尖り刃交じり、上は中直刃、沸える。横手下に小互の目を三つ焼く。帽子 乱れ込み丸く返る。彫物 表に三鉋付剣、裏に護摩箸を彫る。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘。

二代康重のいわゆる「与五郎銘」で、造り込みもよく、元先幅差が少なく、中鋒が延び、腰で反り先で反る室町末期の優刀である。三鉋付剣が堂々としている。茎の腹を比較的薄く仕立てる。銘字も力強く入念に切っている。

④ 短刀 銘 武州住康重

安土桃山時代 天正

刃長 三一・七釐 (二尺四分)。反りなし。

形状 刺刀造、庵棟、重ね厚い。鍛 板目に本交じり。刃文 浅いのたれに互の目交じる。帽子 のたれ込み小丸に返る。彫物 表に素剣、裏に丈比べ樋。茎 生ぶ、浅い先入山形、鑢目切り、目釘孔二内一埋、表棟寄りに五字銘。

康重二代、与五郎銘である。康重の刺刀造りは珍しい。刺刀は、打ち合う刀「打刀」に対して、刺すために用いる刀「刺刀」であり、腰刀すなわち短刀である。本来は、右手で柄を持って刺すもので、右の腰に指し、銘も太刀銘になるものであるが、この刺刀は、短刀として作られている。

⑤ 薙刀 銘 武州下原住康重

安土桃山時代 天正

刃長 五〇・五釐 (二尺六寸六分)。反り 一・九釐 (二分六厘)

形状 薙刀造、庵棟、先張らずに鋒延びる。鍛 板目に本交じり詰む。刃文 のたれの山に互の目が三つ並び繰り返し、物打ちのはたれに小互の目乱れる。帽子 乱れ込み小丸に返る。彫物 表に梅の木、裏に薙刀樋。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに細整で端正な七字銘がある。銘字の「原」の二画が欠画になっている。

康重二代、与五郎銘である。この薙刀は、姿が美しく迫力あり、鍛え、刃文とも入念な注文打ちである。康重に通常みない欠画も珍しく、注文主との関係が考えられる。(拵付)

6 脇指 銘 武州住康重

安土桃山時代 天正

刃長 四七・八釐 (二尺五寸七分)。反り 一・五釐 (四分九厘)

形状 平造、庵棟、反りやや深く、長寸の平造りを上手に仕上げる。鍛 板目に本交じり、本目連なり、肌立ち風で下原鍛冶の特有の地肌である。刃文 互の目丁字に尖り刃を交じえ、小沸つく。帽子 乱れ込んで焼詰め風に僅か返る。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに五字銘。

下原鍛冶には長寸の平造りが多くある。当時の流行か、末相州との関連か。銘は二代与五郎銘とも見えるがやや異なり三代の若年打ちか、古風である。下原刀は切れ味本位の実用刀で、鍛え、焼刃とも低温処理で工夫されている。

7 脇指 銘 武州住康重

安土桃山時代 慶長

刃長 四四・二釐（一尺四寸六分）。反り 一・六釐（五分三厘）。
形状 平造、庵棟、反りやや深く、姿よい。鍛 板目に奎交じり、杢目が連なり独特の地肌である。刃文 互の目乱れ、皆焼がかり末相州風である。帽子 乱れ込み小丸に返り深い。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに端正な五字銘がある。

康重三代であり、末相州に多く見る長寸の平造りである。新古境の作品であるが、古刀の造り込みである。天正末期の製作かと思う。地肌は、高温処理であるならば、地景、地沸になるが、下原刀独得の鍛法である。

⑧ 刀 銘 武州下原住康重

江戸時代 寛永

刃長 六九・三釐（二尺二寸九分）。反り 一・五釐（五分）。
形状 鑄造、庵棟、反りやや深く、中鋒。鍛 板目詰み杢目、大肌交じる。刃文 中直刃に食い違い刃、二重刃、ほつれなど入り、小沸つく。帽子 小丸、深く返る。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに細鑿で七字銘がある。

康重三代である。細鑿でのびのびと切るが最初の一字の「武」が縮む。これと同じ銘振りの奉納刀が、山梨県勝沼町大善寺にあり、「寛永十九年壬午十月吉日」の年紀があり、奉納主は八千石の旗本三枝土佐守重である。家紋入り拵がついている。

9 脇指 銘 武州住康重

江戸時代 寛永

刃長 五五・五釐（一尺八寸三分）。反り 一・六釐（五分二厘）。
形状 鑄造、庵棟、反りやや深く、中鋒。鍛 板目に奎交じり、白け心あり。刃文 のたれに互の目丁字乱れ掃きかける。帽子 のたれ込み小丸に返る。茎 生ぶ、たなご腹がかり先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔二内一埋、表棟寄りに細鑿の五字銘がある。

康重三代である。銘は細鑿で切る。重ね厚くしっかりしている。この細鑿で切る三代銘の地鉄は、初・二代の地鉄と異なる材質のものを使用している。江戸時代も元和・寛永に入り、江戸の町づくりも順調に進み、物資も流通も全国的になり、異なる原材料の取得も可能になったものか。

⑩ 脇指 銘 武州住康重

江戸時代 元和

刃長 三七・〇釐（一尺二寸二分）。反り 〇・八釐（二分六厘）。
形状 鶴の首造、庵棟、重ね身幅ともあり姿がよい。鍛 小板目詰み、地景入り、小沸つく。刃文 のたれに互の目入り、よく沸えて掃きかける。帽子 小丸に返る。彫物 表に梵字（不動明王、カーン）、裏に薙刀樋。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔二内一埋、表棟寄りに細鑿の五字銘がある。

康重三代である。鶴の首造りの寸延び短刀を上手に仕上げている。この地鉄は良質の材料を使用し、地肌が精緻である。注文打ちであろう。

⑪ 刀 銘 武州下原住康重

江戸時代 元和

刃長 六七・八釐（二尺二寸四分）。反り 二・一釐（七分）。
形状 鑄造、庵棟、身幅頃合で、反り深く、重ねやや厚い。鍛 板目に奎交じり、杢目連なりやや肌立つ。鑄地は枳がかり、上半に棟焼がある。刃文 表は浅い互の目、足入り小沸つく。裏は浅い互の目乱れはつれる。帽子 直ぐ丸に返り深い。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔二、表棟寄りに細鑿の七字銘がある。

康重四代とするが、極めて三代に近い造り込みである。銘字は細鑿で三代に似るが、「重」が四代銘字である。

12 脇指 銘 武州下原住内記康重

江戸時代 寛永

刃長 五三・八釐（一尺七寸八分）。反り 〇・六釐（一分九厘）。
形状 鑄造、庵棟、身幅頃合で、反り浅く、中鋒延びる。鍛 板目に奎交じり詰む。刃文 直刃のたれ調にはつれて小沸つく。帽子 直ぐ小丸に返り深い。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りにやや細鑿の長銘がある。

康重四代である。四代から「内記」を使用している。「内記」とは、本来中務省におかれ、詔勅の起草と天皇の行動を記録する書記官であるが、それとは関係なく名乗りになっている。どのような経過からの名乗りか不明である。

⑬ 脇指 銘 武州下原住内記康重

江戸時代 寛永

刃長 五七・二釐（一尺八寸八分）。反り 〇・四釐（一分三厘）
 形状 鑄造、庵棟、身幅頃合で、反りは浅く、中鋒。鍛 板目に杢目、大肌交じる。刃文 のたれに互の目交じえ掃きかけ、二重刃入る。帽子 のたれ込み小丸に返り、表掃きかける。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに長銘がある。

康重四代である。反りが極めて浅いのは注文主の需めだろうか。銘文の鑿が太くなりつつある。四代の没年は三代より先であり、三代と五代に狭まれて現存する作品は多くない。

⑭ 脇指 銘（表） 武州下原住内記康重

（裏） 正保元年八月日

江戸時代 正保

刃長 四八・二釐（一尺五寸九分）。反り 一・〇釐（三分四厘）
 形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合で、中鋒やや延びる。鍛 板目処々大肌交じる。刃文 中直刃小沸つく。帽子 直ぐ小丸に返る。彫物 表裏に棒樋樋先やや下り、丸止め。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りにやや太鑿の長銘と裏に年紀がある。

康重五代の作品である。長命であった五代の比較的前期の作刀で、正保元年（一六四四）は年紀の初見である。

⑮ 刀 銘（表） 武州下原住山本内記康重

（裏） 寛文九己酉年八月吉日

江戸時代 寛文

刃長 七〇・五釐（二尺三寸三分）。反り 一・九釐（六分五厘）
 形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒やや延びる。鍛 板目よく詰み、精緻な地肌となる。刃文 のたれ、のたれの山は互の目乱れで掃きかけ、小沸よくつく。帽子 先ぐ丸に返る。茎 生ぶ、比較的細くして先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔二内一は飾り孔、表棟寄りに長銘がある。

康重五代の入念作である。刃文ののたれに互の目は下原鍛冶の特徴的なものである。寛文九年（一六六九）は康重晩年の作である。

⑯ 刀 銘（表） 武州下原住内記康重

（裏） 以研鉄作之

江戸時代 寛文

刃長 六三・三釐（二尺九分）。反り 一・七釐（五分）
 形状 鑄造、庵棟、身幅頃合で重ねやや厚く、中鋒やや延びる。鍛 板目やや肌立ち、地沸つき大肌交じる。刃文 中直刃小沸つく。帽子 直ぐ丸に返る。茎 生ぶ、茎やや細く仕立て先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに長銘、裏に添え銘がある。

康重五代の添え銘のある作品である。「研鉄」とは、砂鉄または銑鉄等を木炭で作刀に適した鋼にしたもので刀工みずから研したもののである。

⑰ 脇指 銘 内記康重

江戸時代 寛文

刃長 四〇・六釐（一尺三寸四分）。反り 一・四釐（四分六厘）
 形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、大鋒延びる。鍛 板目詰み、大肌交じる。刃文 のたれに互の目乱れ、小沸つく。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔二内一埋、表に四字銘がある。

康重五代である。注文による作刀であろう。五代康重は、正保・慶安・承応・明暦・万治・寛文・延宝と作刀し、康重家新刀期の頂点であり、長命の上、作刀も多く現存し、新刀期康重ではこの五代目だけが年紀を切っている。五代康重の茎は、比較的細く、茎の腹を薄く仕立上げるのが通常である。

（拵付）

18 脇指 銘 武州下原住康重

江戸時代 延宝

刃長 五二・六釐（一尺七寸三分）。反り 一・三釐（四分三厘）
 形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒。鍛 板目詰み、地沸つく。刃文 中直刃小沸つく。帽子 直ぐ小丸に返り深い。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

康重六代とする。六代目康重は五代目より八ヵ月余りに亡くなっている。作刀期間が五代目と重なり、代別を困難にしている。しかしながら六代目は、比較的細鑿で切銘し、「山・本・内」に当り鑿があり、「康重」に特徴がある。

19 脇指 銘 武州住康重

江戸時代 元禄

形状 鎬造、庵棟、先幅狭く元幅広く反り深く古風である。重ね頃合で中鋒ところ。鍛 板目に空交じり、鎬地は柁である。刃文 中直刃よく沸え、小沸つく。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、表棟寄りに五字銘がある。

康重七代とした。六代以降の現存する作品は少なく、僅かに七代としたこの銘のものが数本である。この作品は一見古刀風に見えるが、鎬地は柁目で、銘字も新刀期のものである。注文主の好みの作刀であらう。刃文の直刃も上手でよく沸え手慣れているのに現存する作品は少ない。

20 脇指 銘 武州下原住國重

江戸時代 元禄

形状 鎬造、庵棟、身幅重ね頃合で、中鋒延びところ。鍛 板目に空、大肌交じる。刃文 直刃調に小互の目乱れ、掃きかける。帽子 直ぐ丸に返り、裏掃きかける。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先入山形、鑢目勝手下がり、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

元和三年（一六一七）に三代康重から分家した國重家である。四代目が但馬守を受領しているので、享保以前の作品となる。國重の現存刀は少なく、但馬守が数本で、それ以外は未見であり、貴重な作品である。元禄頃と見る。

21 刀 銘（表）武州住山本外記利長

（裏）十五枚甲伏作

江戸時代 享保

形状 鎬造、庵棟、身幅重ね頃合で、中鋒延びる。鍛 板目に空交じり詰み、本目連なる。刃文 中直刃よく沸え、はつれて二重刃入る。帽子 直ぐ丸に返る。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目筋違、目釘孔二、表棟寄りに長銘があり、裏に添え銘がある。

元和九年（一六三三）に三代康重から分家した外記家である。添え銘の「十五枚甲伏作」があるので、元禄以降の作品で、銘字の「長」を「長」に切る。

22 脇指 銘（表）武州住山本外記利長

（裏）十五枚甲伏作

江戸時代 宝暦

形状 鎬造、庵棟、身幅重ね頃合で、中鋒延びところ。鍛 板目詰む。刃文 のたれ、物打辺小互の目乱れはつれ、小沸つく。帽子 直ぐ丸に返る。茎 生ぶ、刃上り栗尻、鑢目筋違、目釘孔一、表棟寄りにやや細鑿の長銘、裏に添え銘がある。

外記利長五代、時代は宝暦とした。外記利長家は、下原鍛冶のなかで江戸末期まで火床を置き、鍛刀したとされている。作品は比較的多く残っている。

23 刀 銘 武州下原住照重

室町時代 元龜

形状 鎬造、三ッ棟、身幅広く重ね厚く、中鋒延びる。鍛 板目に空交じり処々綾杉風となり精緻。刃文 中直刃、処々に丁字足入り、匂口締りところ、焼落し、水影風あり。帽子 やや乱れ込み丸に返る。裏少し掃きかける。彫物 表に三鉈付草の俱利迦羅、裏に八幡大菩薩。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

照重初代である。重ねは厚く身幅たっぷりとした姿は、さすが初代照重である。下原鍛冶の地肌の一典型を示し、焼落し、水影は特徴の一つである。

24 脇指 銘 武州住山本源二郎照重

安土桃山時代 天正

形状 平造、庵棟、身幅重ね頃合、やや反りつく。鍛 板目に空交じり、空連なり地沸つく。刃文 大互の目乱れ、足入り掃きかけ小沸つく。帽子 のたれ込み小丸に返り深い。彫物 表に三鉈付草の俱利迦羅、裏に八幡大菩薩。茎 生ぶ、ややたなご腹で先刃上り栗尻、鑢目切り、表棟寄りに長銘がある。

照重二代である。二代照重の個名、源二郎が切られている。二代の作品には、個名、年紀入りが多く現存して、出来優れている。また、彫物が上手である。二代照重の典型的な平造りの作品である。

（拵付）

25 脇指 銘 武州住照重作

安土桃山時代 天正

刃長 四五・六釐（一尺五寸）。反り 一・五釐（四分九厘）
 形状 菖蒲造、庵棟、身幅重ね頃合、反りやや深い。鍛 板目に全交じり、本目連なり、「如輪全」となる。刃文 直刃処々はつれ小足入り掃きかけ、二重掃風になり小沸つく。帽子 直ぐ小丸に返り深い。彫物 表に草の俱利迦羅、裏に護摩箸かき流す。茎 生ぶ、ややたなご腹で先栗尻、鑢目切り、表棟寄りに六字銘がある。

照重二代の初期作品である。下原刀に少ない草の俱利迦羅である。刀に疲れごろがあるが、照重特有の精緻な地肌である。

26 脇指 銘 武州下原住照重作

安土桃山時代 天正

刃長 四七・六釐（一尺五寸七分）。反り 一・〇釐（三分三厘）
 形状 平造、庵棟、身幅重ね頃合、反りやや深い。鍛 板目に全交じり、本目処々連なり、やや肌立つ。刃文 大互の目、丁字尖り刃交じり掃きかけ、沸える。焼き出しがある。帽子 のたれ込み、表掃きかけ小丸に返り深い。茎 生ぶ、ややたなご腹で先刃上り栗尻、鑢目切り、表に細鑿で長銘がある。照重二代の初期の作品である。寸延びの平造りに手慣れて上手である。この銘振りで平造りの刀があるが、迫力があり優れている。切れ味には定評がある。

27 脇指 銘 武州下原住山本源次照重

江戸時代 元和

刃長 三七・一釐（一尺二寸二分）。反り 〇・七釐（二分三厘）
 形状 平造、庵棟、身幅重ね頃合、寸延びとなり、僅かに反りつく。鍛 板目に全交じり、本目が連なる。地景入り地沸つく。刃文 小のたれに互の目乱れ、足入り、小沸つき冴える。帽子 のたれ込み小丸に返る。彫物 表に臨兵闘者皆陳列在前、裏に三鉈付劍。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先栗尻、鑢目切り、目釘孔二内一埋、表棟寄りに長銘がある。

照重四代、源次の作品である。刀身の九字は、「兵に臨んで闘う者は、皆烈を陳べて前に在り」と読み、怨み猋降伏を祈念しての調伏の象徴か。または護身の呪文であらうか。

28 脇指 銘 下原住照重

江戸時代 元和

刃長 四六・〇釐（一尺五寸二分）。反り 一・二釐（三分九厘）
 形状 菖蒲造、身幅重ね頃合、寸延びとなり、やや反りがつく。鍛 板目に全交じり、本目連なり、地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れ、尖り刃交じり、掃きかけ足入り小沸つく。帽子 のたれ込み小丸に返る。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに五字銘がある。

照重四代である。照重は二代と四代に作品が多く、優れている。二代は天正という戦国期で、需要も多かった。四代は元和・寛永という江戸の町づくりのなかで下原鍛冶の存在が大きく、注文者が多かったであろう。

29 脇指 銘 下原住照重

江戸時代 元和

刃長 三九・六釐（一尺三寸一分）。反り 一・二釐（三分九厘）
 形状 平造、庵棟、身幅広く重ね厚く寸延び、やや反りつく。鍛 板目に全交じり、本目連なり、地沸つき地景入る。刃文 直刃 小足入り沸える。帽子 直ぐ丸に返る。彫物 表に梵字（不動明王、カーン）、爪付劍、裏に梵字（阿弥陀如来、キリク）、護摩箸かき流す。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに五字銘がある。

照重四代である。四代照重は造り込みが古風で、多くは古刀と見られている。出生は慶長四年（一五九九）で、没年は寛文二年（一六六二）である。

30 短刀 銘 下原住照重

江戸時代 元和

刃長 二九・二釐（九寸六分）。反り 〇・一釐（三厘）
 形状 平造、庵棟、身幅重ね頃合、反り僅かにつく。鍛 板目に全交じり、本目連なり、地沸つき地景入る。刃文 直刃よく沸え、ほつれ、金筋・稲妻入る。帽子 直ぐ丸に返る。彫物 表に草の俱利迦羅、裏に梵字（不動明王、カーン）、素剣かき流す。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに五字銘がある。

照重四代の短刀である。新刀期の短刀は珍しい。四代照重の銘字の特徴は、「原」を「原」と切るところにある。「下原住」を象徴的に切り、誇りとしている。

③① 脇指 銘 照重

江戸時代 元和

刃長 三八・八釐（一尺二寸八分）。反り 一・〇釐（三分）
形状 平造、庵棟、身幅広く重ね頃合、寸延び、反りややつく。鍛 板目に辻交じり、本目連なり、地沸つく。刃文 のたれで互の目交じりはつれ、小沸つく。帽子 のたれ込み小丸に返る。彫物 表に岩上不動明王、裏に護摩箸かき流す。茎 生ぶ、ややたなご腹で先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに細鑿の二字銘がある。

照重四代の寸延びの短刀である。照重は代々彫物が得意であるが、この岩上不動尊は野趣に富む。細鑿の二字銘も珍しい。

③② 刀 銘 武州下原住照重

江戸時代 寛文

刃長 六三・〇釐（二尺九分）。反り 一・八釐（六分）
形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、反りやや深く、中鋒。鍛 板目に辻交じり、本目連なり処々大板目交じる。刃文 のたれに互の目乱れに尖り刃交じり、小沸つき明るい。帽子 のたれ込み掃きかけ大丸に返る。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、表棟寄りに七字銘がある。

照重五代である。照重は四代までの作品は多く残るが、五代は僅かに見る。六代以降の作品は殆んど見ない。五代には他に、「武州下原住山本三左衛門尉照重」銘の刀があり、名乗りは三左衛門尉である。

③③ 脇指 銘 武州住照廣

安土桃山時代 天正

刃長 五八・四釐（一尺九寸三分）。反り 一・九釐（六分四厘）
形状 鑄造、庵棟、反りやや深く、中鋒。鍛 板目に辻交じり、本目連なり、地沸つき地景入る。刃文 のたれに互の目乱れ、尖り刃交じりはつれ、金筋入り、砂流しかかり、小沸つく。帽子 のたれ込み丸に返る。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟に細鑿の五字銘がある。

天正年間に照重家より分家した、初代宗二郎照廣の作品である。現存する作品は少なく珍しい。分家地は照重と同じ横川内で近く、照重の先手を務めたのかも知れない。新刀期始めの作品も残っている。

③④ 脇指 銘 武州住正重

安土桃山時代 天正

刃長 三七・五釐（一尺二寸四分）。反り 一・二釐（三分九厘）
形状 鶴の首造、庵棟、身幅重ね頃合、先反りつく。鍛 板目に本目、大板目交じり、地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れ、小のたれ交じり、足、葉入り、小沸つく。帽子 のたれ込み小丸に返る。彫物 表に草の俱利伽羅の骨子残り、裏は梵字（不動明王、カーン）に蓮台を彫る。茎 生ぶ、ややたなご腹、先刃上り栗尻、鑢目切り、表棟寄りに五字銘がある。

天正年間に照重家より分家した初代源八郎正重の作品である。正重の分家した下長房は横川と地続きである。正重家は享保年間に鍛冶職を中絶している。

35 脇指 銘 武州下原住正重

江戸時代 寛永

刃長 五四・二釐（一尺七寸八分）。反り 一・五釐（四分九厘）
形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒延びる。鍛 板目に辻交じり流れごろ、本目連なり地沸つく。刃文 互の目丁字に尖り刃交じり、掃きかけ砂流しかかり、小沸つく。帽子 乱れ込み丸に返る。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

正重二代の作品で寛永頃の作品と見る。下長房に分家し除地を賜る。下長房の地に移るが、銘文は「下原住」であり、下原に特別な意味をもたせている。

③⑥ 薙刀 銘 武州下原住廣重

安土桃山時代 天正

刃長 五二・六釐（一尺七寸三分）。反り 一・〇釐（三分三厘）
形状 薙刀造、三ッ棟、先張らずに延び、身幅広く重ね厚く、切先延びる。鍛 板目に辻交じり、本目連なり、地沸つく。刃文 互の目丁字乱れ、砂流しかかり掃きかけ、足入り、沸える。帽子 のたれ込み丸に返る。彫物 表裏に薙刀樋。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。天正年間に照重家より分家した、新七郎廣重である。天正の新七郎廣重は多くの剣書も存在を認めているものである。廣重は康重、照重より薙刀が上手で、現存するものも多く、新刀期に続く廣重家のお家芸である。時代を象徴する姿である。

③⑦ 脇指 銘 武州下原住廣重作

安土桃山時代 慶長

刃長 五九・三厘（一尺七寸六分）。反り 二・五厘（八分二厘）

形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、反りやや深く、中鋒延びごろ。鍛 板目に全交じり、杢目連なり、地沸つき地景入る。刃文 互の目丁字乱れ、尖り刃交じり、掃きかけ砂流しかかり小沸つく。帽子 のたれ込み掃きかけ丸に返る。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、表棟寄りに八字銘。新七郎廣重家の二代新兵衛尉廣重の慶長時代の作品である。新兵衛尉の長男が宗國家、二男の金左衛門が安國家、三男の新右衛門が廣重家を興す。新兵衛尉の作品は珍しい。

③⑧ 刀 銘 相模守藤原廣重

江戸時代 寛永

刃長 七一・二厘（二尺三寸五分）。反り 一・二厘（三分九厘）

形状 鑄造、庵棟、身幅広く、重ね厚く、中鋒延びごろ。鍛 板目詰み、地沸つく。刃文 のたれ互の目乱れ、尖り刃交じり、刃縁よく沸え、足、葉入り、匂口明るい。帽子 のたれ込み小丸に返り深い。茎 生ぶ、棟やや丸味をもち、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、表棟寄りに七字銘がある。

新兵衛尉の長子、初代相模守廣重である。寛永年間に相模守を受領している。三宗家の一つである廣重家の宗家となる。二代相模守廣重が水戸光圀から「宗國」の諱を賜り、相模守宗國となる。相模守廣重の現存する作品は多い。

39 刀 銘 相模守藤原廣重

江戸時代 寛永

刃長 六七・八厘（二尺二寸四分）。反り 一・六厘（五分三厘）

形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、中鋒。鍛 板目詰む。刃文 中直刃よく沸え、ほつれ食い違い刃など交じる。帽子 直ぐ小丸に返る。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

初代相模守廣重である。銘字が小振りにまともな晩年銘かと思う。廣重家の先祖である新七郎廣重は、天正年間にまだ八王子城が築城されない時点でその城下にあたる慈根寺に分家し、天正十八年（一五九〇）に八王子城が落城した後もその地に留まり徳川家の御用を務めた。鍛冶屋敷の小名が残っている。

④⑩ 脇指 銘 相模守藤原廣重

江戸時代 寛永

刃長 五七・九厘（一尺九寸一分）。反り 〇・八厘（二分六厘）

形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒延びごろ。鍛 板目に全交じり地沸つく。刃文 中直刃、よく沸え、金筋・稻妻・二重刃入る。帽子 直ぐ丸に返り深い。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

初代相模守廣重である。比較的やさしくまとまった銘振りである。相模守廣重に年紀の入った作品がなく、初代相模守廣重の銘振りによる若年打ちか、壮年打ちか、晩年打ちかは明確には確定していない。

41 脇指 銘 相模守藤原廣重

江戸時代 寛永

刃長 五三・一厘（一尺七寸五分）。反り 〇・四厘（一分三厘）

形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、反り浅く、中鋒。鍛 板目に全交じり、地沸つく。刃文 のたれに小互の目乱れ交じる。茎 生ぶ、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

初代相模守廣重である。四点の初代相模守廣重を出品したが、全体的には初代の切銘であるが、四点とも銘振りが微妙に異なる。それにつれて作品の出来も異なる。同一人の切銘かと疑問もある。二代目の相模守廣重の銘は、初代と異なり、間の延びたゆったりとした銘である。

④② 脇指 銘 廣重

江戸時代 寛永

刃長 五〇・九厘（一尺六寸八分）。反り 一・二厘（三分九厘）

形状 鑄造、庵棟高く、身幅重ね頃合、反りやや深く、中鋒延びごろ。鍛 板目に全交じり、杢目大きく連なり、地沸つき地景入る。刃文 小のたれに互の目乱れ、尖り刃交じり、飛焼きあり。掃きかけ砂流しかかり、小沸つく。帽子 直ぐ丸に返り、棟焼となる。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに二字銘がある。

初代相模守廣重である。初代相模守廣重で二字銘は珍しい。献上品であろうか。また、皆焼がかった作品も珍しい。

④3 刀 銘(表) 相模守藤原宗國
(裏) 真十五枚甲伏造

江戸時代 元禄

刃長 六一・八釐(二尺七分)。反り 二・二釐(七分二厘)
形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、反り深く、中鋒。鍛 板目に全交じり、全目連なり、地沸つく。刃文 太直刃よく沸え、金筋入る。帽子 直ぐ小丸に返る。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目筋違、目釘孔一、表棟寄りに七字銘、裏に添え銘がある。

二代相模守廣重が水戸光圀に「宗國」の諱を賜り、改名した初代相模守宗國である。二代藤五廣重は水戸にいて、大村加卜の弟子となり、水戸家の蔵刀を記録した『武庫刀纂』のなかに「藤五宗國作」の刀が所載されている。

44 刀 銘(表) 相模守藤原宗國
(裏) 真十五枚甲伏造

江戸時代 享保

刃長 六三・五釐(二尺九分)。反り 一・〇釐(三分三厘)
形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、反りやや浅く、中鋒。鍛 板目に全交じり、地沸つく。刃文 小のたれ、上半低い互の目乱れ、よく沸えて足入る。帽子 直ぐ小丸に返り深い。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目筋違、目釘孔一、表棟寄りに七字銘、裏に添え銘がある。

相模守宗國の二代とする。初代と形状、鍛、刃文等よく似るが、銘字が少々異なる。初代宗國の銘字は、二代廣重とよく似ている。

45 脇指 銘 武州下原住廣重

江戸時代 延宝

刃長 五八・四釐(一尺九寸三分)。〇・九釐(三分)
形状 鑄造、庵棟、重ね厚く、中鋒延びごろ。鍛 板目に全交じり、処々大板目流れる。刃文 直刃、表裏に尖り刃が交じり沸つく。帽子 直ぐ丸に返る。茎 生ぶ、丸棟、たなご腹、かり、先栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

元和三年(一六一七)に分家した金左衛門の二代目藤太廣重である。二代藤太の若打ちであろう。この二代目は山本家文書では登載されていないが、現実には刀が数点現存し、初代金左衛門と武蔵太郎安國の間に一世代存在しなければならぬ。この二代目は晩年に藤太廣重入道と名乗る。

④6 刀 銘(表) (武州下原住) 山本藤太廣重
(裏) 天和二年二月日

江戸時代 天和

刃長 六一・九釐(二尺四分)。反り 一・四釐(四分六厘)
形状 鑄造、身幅重ね頃合、中鋒。鍛 板目に全交じり、全目連なる。地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れ、尖り刃交じり、よく沸え掃きかけ砂流しかかり、金筋・稲妻入る。帽子 乱れ込み小丸に返る。茎 磨上げ、丸棟、先栗尻、鑢目切り、目釘孔二、表棟寄りに六字銘、裏に年紀がある。

二代藤太廣重である。天和二年の年紀は貴重である。二・二釐ほど磨上げられている。そして「武州下原住」の五字銘が消されている。(拵付)

④7 脇指 銘 山本藤太廣重入道

江戸時代 貞享

刃長 五八・六釐(二尺九寸四分)。反り 一・五釐(四分九厘)
形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、切先延びる。鍛 板目に全交じり、全目連なる。地沸つき地景入る。刃文 中直刃よく沸え、掃きかけ金筋・二重刃入る。帽子 直ぐ小丸に返り深い。彫物 表に萬葉がなで登奈里志羅須裏に梵字(不動明王、カーン)。茎 生ぶ、丸棟、たなご腹、かり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔二内一埋、表棟寄りに長銘がある。

二代藤太廣重である。この藤太の茎棟の丸は、次の安國にも引き継がれている。彫物の「となりしらず」は、斬られても隣がしらないの意味を示し、切り味を誇示したもの。

④8 刀 銘 武蔵太郎安國

江戸時代 元禄

刃長 六〇・〇釐(一尺九寸八分)。反り 一・七釐(五分七厘)
形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒延びごろ。鍛 板目に全交じり、地沸つき地景入る。刃文 のたれ互の目乱れ、よく沸え金筋・二重刃入り、砂流しかかる。帽子 直ぐ小丸に返る。彫物 表裏棒樋をかき通す。茎 生ぶ、丸棟、先栗尻、鑢目筋違、目釘孔二、目釘孔下中央に六字銘がある。

元和三年(一六一七)に分家した金左衛門廣重の三代目で、初代の武蔵太郎安國である。水戸にて大村加卜の弟子となり、水戸光圀から「安國」の諱を賜り、武蔵太郎安國の銘名のよさも手伝って著名である。(拵付)

49 刀 銘 (表) 武蔵太郎安國

(裏) 享保二丁酉年八月日

江戸時代 享保

刃長 六三・八厘 (二尺一寸)。反り 一・五厘 (四分九厘)
 形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒延びごろ。鍛 板目に辻交じり、杢目連なり、地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れ、小のたれ交じりよく沸え、尖り刃交じり砂流しかかる。帽子 のたれ込み丸に返る。茎 生ぶ、丸棟、先刃上り栗尻、鑢目筋違、目釘孔二、表棟寄りに六字銘、裏に年紀がある。
 初代武蔵太郎安國である。安國六十九歳の作である。享保四年、八代將軍吉宗の命により御浜御殿で鍛刀し、褒美として銀三十枚を賜る。二代安國、弟子武蔵太郎安貞をはじめ他の下原鍛冶も参加している。初代の作品は少ない。

50 刀 銘 (表) 武蔵太郎安國

(裏) 真十五枚甲伏作

江戸時代 享保

刃長 六一・五厘 (二尺三分)。反り 一・二厘 (三分九厘)
 形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、中鋒。鍛 板目に辻交じり、地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れに小のたれ交じり、砂流しかかり沸つく。帽子 のたれ込み丸に返る。茎 生ぶ、丸棟、先栗尻、鑢目筋違、目釘孔一、表棟寄りに六字銘、裏棟寄りに添え銘がある。
 二代武蔵太郎安國である。初代安國三十六歳の時の子である。二代安國の年紀の初見は元禄十二年で、十四歳である。二代の作品は多い。

51 脇指 (表) 武蔵太郎安國

(裏) 真十五枚甲伏作

江戸時代 享保

刃長 五三・九厘 (一尺七寸八分)。反り 一・六厘 (五分)
 形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、中鋒延びごろ。鍛 板目、大板目交じり、やや肌立ち流れる。刃文 中直刃、刃縁沸え掃きかけ、食い違い刃、金筋入る。帽子 直ぐ丸に返る。茎 生ぶ、丸棟、先栗尻、鑢目筋違、目釘孔一、表棟寄りに六字銘、裏に添え銘がある。
 二代武蔵太郎安國である。添え銘の「真十五枚甲伏作」とは、十五回折り返し鍛えた皮鉄で心鉄を包み鍛造する方法で、大村加卜からの伝法である。

52 脇指 銘 (表) 武蔵太郎安國

(裏) 真十五枚甲伏作

江戸時代 享保

刃長 四〇・四厘 (一尺三寸三分)。反り 〇・九厘 (三分)
 形状 鑄造、庵棟、重ね厚く身幅頃合、中鋒延びる。鍛 板目に辻交じり、地沸つく。刃文 のたれに小互の目乱れ、突り刃交じり、よく沸え、掃きかけ砂流しかかる。帽子 直ぐ小丸に返る。茎 生ぶ、丸棟、先栗尻、鑢目筋違、目釘孔一、表棟寄りに六字銘、裏に添え銘がある。
 二代武蔵太郎安國である。中里介山の『大菩薩峠』の主人公机龍之助の愛刀が武蔵太郎安國であり、人気を博した。武蔵太郎安國には殊の外偽物が多い。

53 十文字槍 銘 武州下原住廣重

江戸時代 延宝

刃長 (穂) 一八・九厘 (六寸二分)。(枝) 一四・二厘 (四寸六分)
 形状 十文字槍。鍛 小板目詰み杢がかり、地沸つく。刃文 中直刃沸え小足入る。帽子 直ぐ小丸に返る。茎 生ぶ、先切り、鑢目勝手下がり、表に七字銘がある。
 この槍の銘と同一銘の刀に、延宝三年の年紀がある。寛文・延宝の時代に廣重は、新右衛門家二代に当るが、二代は寛文八年八月に、兵左衛門尉廣重銘にて、甲府八幡宮への奉納刀がある。この槍と銘振りが異なる。新兵衛家は二代相模守廣重で、金左衛門家は二代藤太廣重であり該当しない。

54 刀 銘 (表) 武州下原住廣重

(裏) 寛文五年八月日

江戸時代 寛文

刃長 六五・七厘 (二尺一寸七分)。反り 一・〇厘 (三分五厘)
 形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒。鍛 板目肌地沸つく。刃文 直ぐ焼き出し、小のたれに互の目丁字乱れ皆焼がかり、よく沸え、尖り刃交じる。帽子 直ぐ小丸に返る。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘、裏に年紀がある。
 寛永十二年 (一六三五) に分家した新右衛門と見る。寛文五年 (一六六五) まで三十年であり晩年の作になる。茎の棟は角である。

(掲付)

⑤5 脇指 銘 (表) 武州下原住廣重

(裏) 寛文十二年八月日

江戸時代 寛文

刃長 四五・四釐(一尺五寸)。反り 〇・九釐(三分)
形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒延びごろ。鍛 板目詰み、地沸つく。刃文 小のたれ互の目、尖り刃交じり、刃縁よく沸え、砂流しかかる。帽子 直ぐ丸に返り深い。茎 生ぶ、棟やや丸、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘、裏に年紀がある。

寛永十二年に分家した新右衛門家の代別はできていない。年紀等の入ったものは少なく、確定的な資料に欠けるためであるが、段々にまとまりつつある。

(拵付)

⑤6 脇指 銘 武州下原住廣重

江戸時代 元禄

刃長 五九・一釐(一尺九寸五分)。反り 〇・八釐(二分六厘)
形状 鑄造、庵棟やや低く、身幅広く重ね厚く、中鋒延びごろ。鍛 板目、処々大板目交じり、地沸つく。刃文 中直刃よく沸え、掃きかけ金筋・二重刃入り、砂流しかかる。鑢地は柃、棟焼がある。帽子 直ぐ丸に返る。茎 生ぶ、ややたなご腹となり、先刃上り栗尻、鑢目やや勝手下り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

一見古風に見えるが新刀である。この銘のものをまま見かけるが、世代等未詳であるが、廣重工房での作品である。

57 脇指 銘 武州下原住廣重

江戸時代 享保

刃長 五九・八釐(一尺九寸七分)。反り 一・一釐(三分六厘)
形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、中鋒延びごろ。鍛 板目処々流れ、地沸つく。刃文 直刃沸え、食い違い刃・二重刃入る。鑢地は柃である。帽子 表直ぐ大丸に、裏のたれ込み掃きかけ丸に返る。茎 生ぶ、棟やや丸、たなご腹がかり、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。下原住廣重銘の製作年代は、時代が下がるとともに茎尻の形に変化があり、栗尻などの丸形から剣形などのように角形に変わる。この脇指も姿は古風であるが、鑢地は柃で、新刀地鉄である。

58 脇指 銘 武州下原住廣重

江戸時代 宝暦

刃長 五一・九釐(一尺七寸一分)。反り 一・一釐(三分六厘)
形状 鑄造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒延びごろ。鍛 板目、地沸つく。刃文 互の目そろい、よく沸え足入る。帽子 のたれ込み掃きかけ丸に返る。茎 生ぶ、先入山形、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。栗尻が入山形になっている廣重である。下原刀で茎尻が入山形も見なれないところである。銘字も下原刀独特の切り方があるが、それと異なり、丸みをもった小さな銘である。刃文も足長丁字風の高い焼刃は下原刀にはないのである。これらは時代の変ったことを示している。

⑤9 脇指 銘 洛陽住人廣重

江戸時代 元禄

刃長 五七・九釐(一尺九寸一分)。反り 一・二釐(三分九厘)
形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、中鋒延びごろ。鍛 板目、全交じり、全目連なる。刃文 互の目乱れ、尖り刃交じりよく沸え、砂流し金筋・稲妻入り、小沸つく。帽子 表裏掃きかけて丸に返る。茎 生ぶ、先入山形、鑢目筋違、目釘孔一、表棟寄りに六字銘がある。

廣重の「洛陽(京都)住人」は珍しい。鍛えは板目肌全が交じり、全が連なる下原刀特有の地肌であり、京にても下原鍛冶の鍛法で作刀している。茎尻は入山形で時代は元禄以降と思われる。廣重家の誰かについては未詳である。

⑥0 刀 銘 因幡守廣重

江戸時代 寛文

刃長 六五・一釐(二尺一寸五分)。反り 〇・九釐(三分)
形状 鑄造、身幅広く重ね厚く、中鋒延びる。鍛 板目よく詰み、地沸つき地景入る。刃文 のたれ互の目よく沸え、尖り刃交じる。帽子 のたれ込み小丸に返る。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目筋違、目釘孔一、表棟寄りに五字銘がある。

下原鍛冶出身で、小笠原家の抱刀工となり、京五鍛冶について修行したともいわれ、著名な刀工である。『刀工受領選』にある「武州下原住猪因幡守廣重 万治」は江戸神田住人であり、この刀とは別人である。廣重家からは多くの廣重が京都や江戸に出て活躍をしている。

⑥1 刀 銘 猪廣重

江戸時代 元禄

刃長 六二・一釐（二尺五分）。反り 〇・九釐（三分）
 形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、反り深く、中鋒。鍛 板目詰む。刃文 大互の目乱れ、互の目の頭は鎢筋にとどき、刃縁よく沸え、飛焼交じる。帽子 直ぐ丸に返る。茎 僅か区送る。先入山形、鑢目筋違、目釘孔二内一は控え孔、表棟寄りに大振りの三字銘がある。

猪を姓のように切っている。猪ノ鼻、猪俣の略か。下原鍛冶は「藤原」である。猪は摩利支天または愛宕神社の使いといわれる。刀鍛冶の銘としては珍らしい。寛文頃の神田住因幡守猪廣重の二代目か。因幡守銘のものに偽物が多い。

⑥2 刀 銘 武州下原住盛重

江戸時代 寛永

刃長 六一・二釐（二尺二分）。反り 〇・九釐（三分）
 形状 鑄造、庵棟、身幅広く、重ね厚く、反り浅く、中鋒延びる。鍛 板目詰で地沸つく。刃文 中直刃よく沸える。帽子 直ぐ丸に返る。表裏、横手上に玉を焼く。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目切り、目釘孔二内一は控え孔、表棟寄りに七字銘がある。

銘振りは下原鍛冶のものであるが、山本諸家の世代に属さない刀工である。剣書は古刀期天正頃としているが、本刀は寛永頃と見る。

63 脇指 銘 武州下原住盛重

江戸時代 寛永

刃長 五四・六釐（一尺八寸）。反り 一・二釐（三分九厘）
 形状 鑄造、庵棟、身幅頃合、重ねやや厚く、中鋒。鍛 板目、李交じり、裏やや大肌交じる。刃文 互の目乱れ、尖り刃を交じえ、刃縁よく沸え小沸つき、焼き出しがある。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目切り、表棟寄りに七字銘。

下原鍛冶特有の銘振りであり、やや大きめの目釘孔は下原鍛冶のものである。『古今鍛冶備考』には「武州下原住盛重と打ち、天正比、業物」とある。盛重は古刀期から新刀期にかけての刀工であり、一人の存在と考えるが、本刀は寛永以降の作品である。山本諸家に属さない刀工で、修業して「下原」の名称と「重」の一字をもらった下原鍛冶の一人である。作品は少ない。

64 脇指 銘 下原住清重

江戸時代 元禄

刃長 五四・三釐（一尺七寸八分）。反り 一・七釐（五分六厘）
 形状 鑄造、庵棟、身幅重ねとも頃合、先反りつき、中鋒。鍛 板目、大板目交じる。刃文 中直刃、刃縁よく沸え、食い違い刃交じる。帽子 直ぐ小丸に返る。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目大筋違、目釘孔一、表棟寄りに五字銘。

銘鑑もれの刀工である。銘文として、「武州下原住清重」「武州住清重」等がある。山本諸家の世代に属さない刀工である。本工の銘は下原鍛冶特有の特徴のある銘ではない。茎は新刀茎で、ややたなご腹がかかるが、鑢目が大筋違は下原刀には珍らしく、今後の研究を要する作品である。

65 脇指 銘 武州下原住廣光

江戸時代 元禄

刃長 五三・三釐（一尺七寸六分）。反り 一・六釐（五分三厘）
 形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、中鋒延びころ。鍛 板目詰み、流れごころあり。刃文 互の目、尖り刃交じり、よく沸え砂流しかかる。帽子 のたれ込み丸に返りやや深い。茎 生ぶ、先入山形、目釘孔一、鑢目大筋違、表棟寄りに七字銘がある。

銘鑑もれの刀工である。銘文として、「下原住廣光」「下原住廣光作」等がある。銘振りが、特徴ある下原鍛冶のものでない。目釘孔も小さい。鑢目が荒い大筋違で下原刀としては珍らしい。今後の研究を要する刀工である。

⑥6 刀 銘 武蔵太郎源安貞

江戸時代 安政

刃長 七七・四釐（二尺五寸五分）。反り 一・五釐（五分）
 形状 鑄造、庵棟、身幅広く、重ね厚く、中鋒、茎が長い。鍛 小板目詰み、地沸つき地景入る。刃文 中直刃よく沸える。帽子 のたれ込み丸に返る。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目切り、表棟寄りに七字銘がある。

初代安貞は、武蔵太郎安國の門人で、享保四年（一七一九）には御浜御殿で安國の相槌として銀三枚の褒美を得ている。本刀は四、五代目にあたる安貞である。安政二年（一八五五）に酒井清江介正近との合作刀を高尾山に奉納している。本名を井出浅右衛門といい、八王子市高尾町字小名路の出身である。

（拵付）

67 太刀 銘 武蔵丸吉英真十五枚甲伏作

江戸時代 宝暦

刃長 六八・八釵（二尺二寸七分）。反り 一・〇釵（三分三厘）

形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、反りやや浅く、中鋒。鍛 板目よく詰む。刃文 互の目調の中直刃よく沸え、砂流し・金筋・二重刃入る。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目大筋違、目釘孔一、佩き表棟寄りに長銘がある。

「真十五枚甲伏作」の添え銘のとおり、武蔵太郎安國の門人である。本名は宮川源蔵といい、あきる野市引田の刀工である。川越の鴨町（川越市志義町）にも住する。水心子正秀の師匠で、明和八年に「武州八王子下原の後裔吉英方に罷越稽古致し候」の手紙を友人に送っている。現存する作品は少ない。

68 刀 銘（表） 武劔住延壽吉邦

（裏） 天明二年三月日

江戸時代 天明

刃長 六八・六釵（二尺二寸七分）。反り 一・二五釵（四分一厘）

形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、中鋒やや詰まる。鍛 板目肌全交じりよく詰み、流れごろあり、地沸つく。刃文 のたれ、刃縁よく沸え、砂流しかり金筋・二重刃入り沸つき、焼き出しがある。彫物 表裏、棒樋丸止めに添樋あり。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目大筋違、目釘孔一、丸棟、表棟寄りに七字銘がある。

武蔵丸吉英の子の吉國同人である。四十三歳の作である。本名は宮川菅治、没年は文化十一年（一八一四）、墓所はあきる野市引田の真照寺である。

69 刀 銘 武玉川住吉之作

江戸時代 文久

刃長 六一・二釵（二尺二分）。反り 一・五釵（四分九厘）

形状 鑄造、庵棟、身幅重ね頃合、反りやや深く、中鋒延びる。鍛 板目詰み、やや流れごろあり。刃文 中直刃、処々金筋・二重刃入り、小沸つく。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目化粧、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

吉之は、宮川鍛冶の門という。慶応三年上野聖護院宮から法眼の称を許さる。多摩市乞田に住し、弟正之とともに乞田鍛冶という。銘は、「武州住吉之」「武州調布住吉之」「法眼吉之作」がある。武玉川の銘は珍しく、「武」は武州の省略か。弟正之の銘は「武州調布住法眼正之作之」である。

参考刀

70 脇指 銘 相州住正廣

室町時代 応永

刃長 三六・三釵（一尺二寸）。反り 〇・六釵（二分）

形状 平造、三つ棟、身幅広く、重ね薄く、反り浅く、寸延びとなる。鍛 板目肌、全交じりやや肌立ちごろとなり、地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れに丁字交じり、処々に飛焼かかり、金筋・砂流しかり、沸よくつく。帽子 乱れ込んで先小丸に返り焼き下げる。彫物 表に三鉋付剣、裏に刀樋、梵字（不動明王、カーン）、蓮台を彫る。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目切り、目釘孔二、表目釘孔の下に細鑿の五字銘がある。

相州正宗—廣光—正廣の流れのなかで、室町初期、三代正廣と見る。

71 脇指 銘（表） 相州住廣正

（裏） 宝徳二年八月日

室町時代 宝徳

刃長 四三・五釵（一尺四寸三分）。反り 〇・八釵（二分六厘）

形状 平造、三つ棟、身幅やや狭く、重ね薄く、先反りつく。鍛 板目肌、全交じり、地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れに丁字交じり、沸よくつき金筋・砂流しかり、上半は皆焼がる。帽子 乱れ込み小丸に返り、長く焼き下げる。茎 僅か区送り、先栗尻、鑢目切り、目釘孔二、表目釘孔下にやや細鑿の五字銘、裏に年紀がある。

初代廣正は正廣の子で、宝徳の廣正は四代目といわれている。（拵付）

72 脇指 銘 相州住綱廣

室町時代 天正

刃長 四一・九釵（一尺三寸八分）。反り 〇・七釵（二分三厘）

形状 平造、三つ棟、身幅広く重ねやや厚く、先反り、ふぐらつき寸延びとなる。鍛 板目肌よく詰み、全交じり、流れごろあり、地沸つき地景入る。刃文 大互の目乱れ、丁字交じり 砂流しかり金筋・二重刃入り小沸つく。帽子 表のたれ込み大丸に、裏乱れ込み丸、表裏とも長く焼き下げる。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表目釘孔下に細鑿の五字銘がある。綱廣三代目、天正慶長頃の作品である。山村宗右衛門尉と称し、鎌倉扇ヶ谷に住む。津輕藩主の招きによりその地で打つ。寛永十五年二月、九十一歳没。

73 直槍 銘 義助

室町時代 天文

刃長 四三・八釐（二尺四寸四分）
形状 正三角直槍。鍛 板目肌に疋交じり、よつ詰み、よく地沸つき地景入る。刃文 直刃よく沸つき、砂流し・金筋・喰違刃入り、明るく冴える。帽子 表は小丸に返り焼き下げる。彫物 平の部分に棒樋丸止め。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目勝手下り、目釘孔一、乎の部分目釘孔の上にやや大振りの二字銘がある。

駿州嶋田（静岡県島田市）住義助の四代目の作品である。槍は武士の表道具であり、義助は槍造りの名手である。小田原城下の鍛冶である小田原相州といわれる一派の中心は嶋田鍛冶であり、下原鍛冶はその影響を多く受けている。

74 短刀 銘 助宗作

室町時代 永禄

刃長 三二・二釐（一尺三分）。反り 〇・四釐（一分五厘）
形状 平造、庵棟、身幅広く重ねやや薄く、先反りつき寸延びとなる。鍛 板目肌に疋交じり、処々大肌風あり、地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れに尖り刃交じり、刃縁よく沸え、砂流し・金筋・二重刃入り、小沸つく。帽子 直ぐに大丸に深く、焼き下げる。彫物 表に腰樋丸止めに添え樋、裏は護摩箸。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目勝手下がり、目釘孔一、表目釘孔の下に三字銘がある。

初代助宗は嶋田義助の弟といわれ、この助宗は二代と見る。甲州打ちが多く、「おそろく」造りの作者である。櫃中の不動明王の浮彫は下原彫に似ている。

75 刀 銘 総州住嶋田輝吉

江戸時代 寛永

刃長 六三・〇釐（二尺八分）。反り 一・一釐（三分六厘）
形状 鎬造、庵棟、身幅広く重ね厚く、中鋒。鍛 板目肌、疋交じり、肌立ち流れる。刃文 互の目乱れ、尖り刃交じり、刃縁沸つき、砂流し・金筋・喰い違い刃入る。帽子のたれ込み小丸に返る。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目切り、目釘孔一、表棟寄りに七字銘がある。

総州は下総国古河（茨城県古河市）のことで、嶋田出身の鍛冶で「嶋田」を姓としたもの。寛永頃の古河藩は大老土井利勝が藩主で所領十六万石である。銘文は他に、「総州住輝吉」「総州古河住嶋田輝吉」等がある。（拵付）

76 脇指 銘 次廣

室町時代 永正

刃長 五一・六釐（一尺七寸）。反り 一・六釐（五分三厘）
形状 鎬造、庵棟、身幅やや狭く、反り深く、中鋒。鍛 板目肌流れて、処々大肌交じる。地沸つき地景入る。刃文 互の目乱れで、尖り風の互の目が三つ連なりそれをのたれ継ぎ、焼き高めに沸むらにつき、砂流し・金筋入る。帽子 乱れ込み丸に返る。彫物 表に腰樋かき流す。茎 生ぶ、先刃上り栗尻、鑢目勝手下がり、目釘孔一、表棟寄りに二字銘がある。

藤沢鍛冶は鎌倉山ノ内鍛冶の分流で、明応年間に藤沢に移る。のち若狭国小浜に行く。康重家文書にいう「藤沢在に鍛冶を営む」が事実なら関係は深い。

77 太刀 銘 次廣作

室町時代 天文

刃長 六二・六釐（二尺六分）。反り 一・五釐（四分九厘）
形状 鎬造、庵棟、身幅広く重ね厚く、腰反り深く、中鋒延びる。鍛 小板目詰み、流れごころあり、肌立つ。刃文 広直刃調にのたれ互の目交じり、刃縁よく沸え、葉・二重刃・足入り小沸つく。帽子 乱れ込んで返る。彫物 表棒樋かき通し、裏二筋樋。茎 生ぶ、先栗尻、鑢目切り、丸棟、佩き表棟寄りに三字銘がある。

若狭国小浜（福井県小浜市）の刀工という。鎌倉山ノ内鍛冶の分流で、北条早雲による鎌倉焼き打ちや三浦一族の滅亡により、藤沢へ、そして小浜に移住した。下原鍛冶と藤沢鍛冶との研究は今後の課題である。

〈拵〉

⑦8 金梨子地塗松竹梅葵紋蒔絵薙刀拵

金梨子地塗に松竹梅と葵紋を金蒔絵にして散らし、総金具は銀磨地に唐草文を手彫にしている。

この薙刀拵は尾張徳川家伝来の品で、葵紋は、五木瓜の二重の外郭の内に尾張葵を納めたもので、陸奥梁川藩大久保家の紋である。梁川藩は尾張二代藩主光友の三男、出雲守義昌が、天和三年（一六八三）八月に、陸奥国伊達郡梁川に幕府から新地三万石を給与されて成立した藩である。義昌の子、義方を経て、その子義真は嗣子なく死去、本家尾張藩から三代綱誠の子、通春（のちの宗春）が入って再興したが、享保十五年（一七三〇）、まだ封地に赴かないうち、尾張藩第七代藩主に迎えられ、梁川藩は廃藩となる。

この拵には、二代康重の薙刀が納められ、松竹梅に家紋入り蒔絵は、当時における下原鍛冶の社会的な評価を示したものととして注目される作品である。

⑦9 朱塗螺旋刻鞘脇指拵

朱塗の螺旋刻で珍らしい拵である。縁頭は、赤銅磨地に猪を毛彫している。銘は「永壽（花押）」で桂氏、筑後国久留米の生まれで、久留米藩有馬家の抱工となる。江戸芝田村町に住し、品川東海寺中の師聖院に眠る。江戸時代中期の金工である。画題の猪は、猪武者などといって軽んじられたのは江戸後期のことで、それ以前は思慮があつて勇気のある武士の褒め言葉であつたからである。鐔は、赤銅磨地に板目模様を手彫にしている。小柄、筭が欠けている。

この拵には、五代内記康重、一尺三寸四分が納まる。

⑧0 朱塗鞘合口脇指拵

この塗鞘は現代の職方の作品で、現代職方の水準を示している。柄は、出鮫皮で朱を塗り、黒漆をかけて磨いている。朱塗鞘との調和をとっている。目貫は猫を赤銅で容彫にしている。猫の目貫も珍らしい。筭は割筭で赤銅七々子地に高彫色絵で雲龍が彫られている。この割筭は、江戸時代の作品で無銘であるが、後藤家のものである。下緒の組紐も現代作品である。

この拵には、二代源二郎照重、一尺四寸八分が納まる。

⑧1 茶色石目地塗鞘打刀拵

茶色石目地塗の鞘に、柄は、白鮫皮着せに茶金糸巻である。縁頭、鐔は鉄磨地無文で、鐙り変り袋形で猪目透しが入っている。目貫は、花筭を赤銅高彫色絵で仕上げている。鐔は、条巻木瓜形鉄磨地である。時代は江戸後期である。

この拵には、山本藤太廣重、天和二年二月日、二尺四分が納まる。

⑧2 茶色石目地雲文塗海老鞘打刀拵

茶色の石目地に雲文を入れて塗り、鞘の先が海老のように反っている。柄は白鮫皮を着せ、黒糸で巻いている。縁頭は、鉄地に雲龍を肉彫にしている。銘は、「江刃彦根住藻柄子宗典製」である。宗典は喜多川氏、京都の出身で、近江国彦根の住で、享保八年、寛延三年等の年紀があり、江戸時代中期の金工である。鐔は、鉄磨地無文の大きな袋形である。目貫は、駒図赤銅容彫である。

この拵には、武蔵太郎安國初代、一尺九寸八分が納まる。

⑧3 黒呂茶変り塗鞘打刀拵

鞘は、黒呂茶変り塗りで、柄は、白鮫皮に漆塗り皮糸で巻いている。縁頭は、赤銅地に、竹と虎を高彫象嵌で色絵している。目貫は赤銅地容彫色絵、鐔は鉄地に鋸紋金象嵌で、ぶどう、扇他を描いている。両櫃は赤銅で埋めている。

この拵には、武州下原住廣重、寛文五年八月日、二尺一寸七分が納まる。

黒呂変り塗鞘脇指拵

鞘は、黒呂変り塗りの脇指拵で、柄は、白鮫皮を着せ、黒糸で巻いている。縁頭は、黄銅磨地に高彫象嵌色絵で鷺の図がある。目貫は、赤銅容彫色絵で鳶の図である。小柄は、黄銅石目地に高彫象嵌色絵で勝虫、ぶどう、ふくべの図がある。鐔は、鉄地に金布目象嵌で雁の図がある。片櫃を赤銅で埋めている。

この拵には、武州下原住廣重、寛文十二年八月日、一尺五寸が納まる。

青貝微塵朱変り塗鞘打刀拵

鞘は、朱塗の底に青貝が微塵に散っている。鞘口、長鍬鐔りは臙銀石目地である。柄は、白鮫皮を着せ、濃紺の糸で巻いている。縁頭は、鉄地に菊花紋を高彫象嵌色絵している。目貫は、表に雄、裏に雌の臥牛を赤銅で容彫し色絵している。鐔は、鉄地の長丸形で、片切彫で龍図がある。銘は、草書で「成龍軒栄寿（印）」。栄寿は、京都の生れで摂津国大阪の住人、江戸時代中期の人である。両櫃は赤銅で埋めている。

この拵には、武蔵太郎源安貞、二尺五寸五分が納まる。

朱黒呂変り塗鞘合口脇指拵

鞘は、朱と黒の変り塗りの合口拵で、柄は、白出鮫皮、縁頭、鞘口、裏瓦鐔りは、雨龍に紗綾文図、四分一磨地に金象嵌である。目貫は、雨龍図を赤銅地容彫に金色絵している。小柄は、縄暖簾図を赤銅七々子地に高彫象嵌色絵している。

この拵には、相州住廣正、宝徳二年八月日、一尺三寸八分が納まる。

黒呂塗鞘打刀拵

鞘は、黒呂塗りで鞘口下に刻みを入れている。柄は、白鮫皮を着せ、茶金糸で巻いている。頭は磨き角で、縁は赤銅七々子地に扇の図を高彫色絵している。銘は、「後藤連乗（花押）」である。後藤休乗の次男で、分家して三郎右衛門家を創業する。元禄四年（一六九二）に没した。目貫は、赤銅容彫色絵で鐔は、鉄地鋤之彫で菊花の図を透し彫りし、金覆輪している。銘は、「可水作之」とある。小柄は、赤銅七々子地に菊花を高彫色絵している。拵は、割拵で臙銀磨地に毛彫の花纹がある。

この拵には、総州住嶋田輝吉、二尺八分が納まる。